

# 養護教諭の職務に関する研究 —保健室来室理由からみた課題—

A Study on Working Duties of Yogo Teacher and Themes  
- From High School Students' Circumstances of Coming to School Infirmary -

G110002 川畑 幸代

Yukiyo Kawabata

指導教員：加藤象二郎

キーワード：養護教諭、保健室、生徒、保健室利用記録

## はじめに

養護教諭の実務からその職務が多様であり、生徒対応しながら、報告・連絡を平行処理する場合も多い。外科的処置では救急処置後、学校医や医療機関、保護者との連絡調整を実施しなければならない。また内科的主訴は対応が複雑な場合が多く、保護者や教職員との相談に長時間を必要とする。相談業務には、客観的事実や情報の必要性を痛感した。

## 目的

養護教諭の相談業務や保健室経営には保健室利用状況に関する客観的情報が不可欠と思われる。匿名性を意識した全国規模調査<sup>1)</sup>が多い中で、単一校についてのこの種研究や報告は少ない<sup>2)</sup>。本研究はこうした背景を踏まえ、単一校の保健室利用状況の特徴を統計的に分析し、(1)保健室経営や相談業務への有効活用視点と(2)データ内容の課題等を検討することが本研究の目的である。

## 方法

- 1) 期間：2013.4.1～2014.3.31
- 2) 対象：A県内共学高校の保健室データ
- 3) 分析データ項目：学年、性別、来室月・曜日、時間割区分、滞在時間、来室理由

## 結果

保健室に来室した生徒の内訳は、外科系の対応件数は849件、内科系の対応件数は1939件で外科系の約2.3倍であった。データ項目中に「不明」のものは分析除外。

### 1) 外科系傷害について (図1)

外科系の来室理由では、「痛み(捻挫、打撲、筋肉痛等)」が200件(27.7%)、次いで「擦過傷」が128件(15.1%)、「捻挫」の84件(9.9%)。

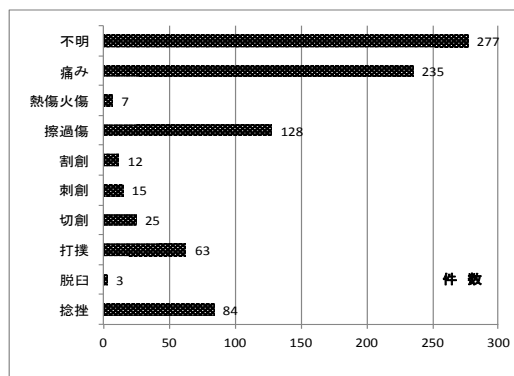


図1 外科系主訴の来室件数

1学期では5月～6月が190件、2学期では9月～11月の合計が386件。2学期は体育大会や文化祭の時期で外傷が多く、特に女子生徒の怪我が多いのが特徴。

(1)運動器傷害は高2女生徒が最も多く、傷害部位では有意に上肢部、次いで下肢部、体幹部であった( $\chi^2(5)=352.45, p<.01$ )。

(2)来室理由は「痛み」が有意に多く、女生徒は男子生徒の約2倍( $p=0.0034$ )。

(3)時間割では3限目の授業時間と直後の休み時間、放課後で特に女生徒が多い。

### 2) 内科系主訴について (図2)

内科系理由では、「頭痛(446件)」、「吐き気(284件)」、「胃・腹痛(258件)」であった。

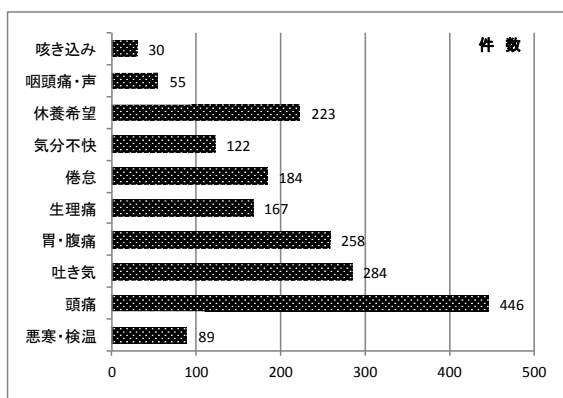


図2 内科系主訴の来室件数

- (1) 「休養希望」が2学期9月に（90名）、「頭痛」で9～11月に多い。1学期では5月の「頭痛」が60名/月で多く、三寒四温の時期と関係しているかもしれない。
  - (2) 保健室滞在時間長では、頭痛・吐き気・胃痛・腹痛で2時間を超える滞在時間。対話希望（5分程度）や過呼吸生徒数は少数だが、メンタル面における時間配分の難しさが背景にあるかもしれない。
  - (3) 時間割との関係を見ると、授業合い間の休み時間に来室する生徒が「頭痛」が多い。
  - (4) 内科系での来室理由の原因分析が可能な個人生活情報が記録されていなかった。
- 3) 主成分分析について（図3）  
 離散型データが多いため、これらデータ項目を統合しえる尺度を求める主成分分析を実施。

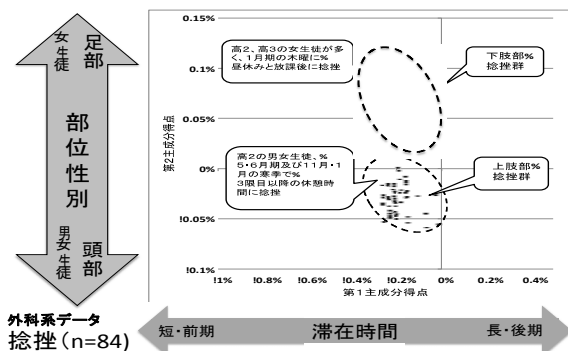


図3 外科系データ主成分分析結果

外科系データでは2つの主成分で90%の寄与率、これらの主成分を「滞在時間」と「部位性別」と命名。内科系データでは2つの主成分で33%の説明率で、効率的な主成分抽出は出来なかったが、「来室時期」と「性別・滞在時間」と命名。

4) 養護教諭としての職務について

今回の収集データからは来室生徒への主訴対応の統計的検討のみで養護教諭の職務内容、連絡調整や相談業務等のデータが無いためその職務負担については分析できな

かった。単純積算で生徒の外科系理由の滞在時間は延べ5174h、内科系理由では63481h、合計68655hである。収容人数や養護教諭複数配置を配慮しても養護教諭一人当の対応密度は過重と推測される。このことは「相談希望」生徒への対応時間は25分未満が4名、51分以上が5名という数字から推測される。

考察および今後の課題

- 1) 運動器傷害については捻挫・打撲やこれに起因する痛みの発生・受傷部位は圧倒的に下肢部と上肢部に集中、女生徒の受傷が有意に多い。発生時期のデータは記載されているが発生場所・活動内容等の関連情報が不明、安全対策上の必要情報である。
- 2) 内科系ではいずれの主訴において女生徒と男生徒の比率は70%対30%。安林<sup>2)</sup>によると季節の変わり目の服装、生活内容、勉強意欲あるいは友人関係や家族関係といったメンタルな要因が関与していると考えられるが、これら要因の関与度を推定しえる記録情報の収集が今後の課題。
- 3) 主成分分析を適用した結果、内科系の主訴で来室する生徒の要因を特定する説明変数では不十分で匿名性に配慮した自記式アンケート形式の採用が望まれる。
- 4) 養護教諭の連絡調整や相談業務に関連するデータがなかったため業務負担度の分析ができるデータの収集法が課題。

1) 采女智津江、児童生徒の健康状況と保健室の役割、児童心理、63巻14号、2013  
 2) 長澤美代子他、高校生の保健室利用状況に関する一考察、湊川女子短期大学紀要、75-80,1999